

## 館林キリスト教会 デポジションノート（2007年）

4月 1日 今日の通読箇所 サムエル記上 25 : 18 ~ 38

サムエル記上 25章 18 ~ 38

ナバルの恩知らずと無礼に対して、ダビデとその一党が怒ったのは無理もないが、さればと言って、ナバルの家を襲い、人を殺し、略奪するのは良くない。それでは神の祝福も、人の信頼と指示も失い、後にダビデが国王になったとしても、これはその汚名となり、良心の痛みとなって残るのである。ナバルの妻アビガイルが、ダビデに忠告したのはそれであった。ダビデは彼女の言に従い、怒りの勢いにまかせて同胞の血を流すという、とんでもない間違いから守られたのであった。「正しい人の口は人を救う」箴言 12章 6

4月 2日 今日の通読箇所 サムエル記上 27 : 1 ~ 12

サムエル記上 27章

いよいよ身の危険を感じたダビデは、よんどころなく国を出て、年来の敵国であるペリシテの王に頼った。その間、時々部下をひきいて、ともすればイスラエルを略奪しようとする、異邦の部落を襲撃した。そして帰って来ると、ペリシテの王には「私はサウル王に敵対しているので、イスラエルの町を襲撃して来たのです」と、うその報告をしてごまかしていた。しかし、こんな危い綱渡りいつまでも続くはずはなく、やがて本当に進退きわまる時が来る。事情まことに気の毒ではあるが、これはダビデの失敗であった。

4月 3日 今日の通読箇所 サムエル記上 28 : 3 ~ 20

サムエル記上 28章 3 ~ 20

サウルがその心をかたくなにして、靈的暗黒の中に生活する間、神の祝福が失われてしまったことは、誰の目にもあきらかとなり、いかに無理な努力を重ねても、もはやあらゆる方面で行き詰まり、すでにその運命はきわまったのであった。その中で、サウルは、かつての信仰の恩師であったサムエルを慕って、自分が追放した口寄せの老婆を探してでも、サムエルの言を聞こうとする、その心根はあわれである。しかしサウルがサムエルから聞いたのは、結局、神の裁きの宣言であった。我々も、「罪の惑わしによって心をかたくなにせぬよう、今日という日々に、互に励まし合おう」ヘブル 3章 13

4月 4日 今日の通読箇所 サムエル記上 29 : 1 ~ 11

サムエル記上 29章

ダビデは危険を避けて亡命はしているものの、かつて一度も、サウル王に刃向ったことはない。サウルはイスラエルの王で、神によって定められた秩序の代表者であるからである。しかるに今や、ペリシテ軍の一武将として、公然戦場で、サウル王と戦わねばならないはめとなった。幸いに他の將軍たちの猜疑心によって、前線から外されたが、読んでいる我々でも冷や汗の場面だ。こういうジレンマに陥らぬよう、我々にとっても、日々の祈りと注意は大切である。

4月 5日 今日の通読箇所 サムエル記上 30 : 1 ~ 20

サムエル記上 30章 1 ~ 20

アマレク人は、火事場泥棒のような遊牧民で、戦争のうわさを聞くと、すぐに獲物を求めて、野良犬のように出て来る。今、早速、ダビデが出陣して手薄になったチグラグを襲って略奪した。ダビデのあいまいな態度は、すでに人々の信頼を失いかけていたので、この損失は、ダビデとその一党に結束に取って致命的な結果になりかねなかったのである。ダビデはすぐにアマレク人を追跡して報復し、奪われた家族や財産を取り戻すことができ、やっと事なきを得たが、さすがダビデも、亡命生活はもう限界で、これ以上はもちこたえられ相もない。しかし今、神は彼の為に「のがれるべき道」を備えて下さったのであった。

4月 6日 今日の通読箇所 サムエル記上 31 : 1 ~ 13

サムエル記上 31章

サウル王とユダは、旧新約を通じて不思議な人物とされている。二人とも神の恵みを深く経験し、のちに神をはなれ、二人とも悲惨な最後を遂げたのである。これらは「我々に対する訓戒」となり「立っていると思う者が倒れぬよう」気をつけることをうながしている。コリント第一、10章。暗たんたるこの章の中の一つの美談は、前にサウルによって救われたヤベシ・ギレアデの人々が、昔の恩義を忘れず、命がけで敵陣を突破し、城壁にさらされていたサウルの死体を奪って、手厚く葬ったことだ。

4月 7日 今日の通読箇所 詩篇 第1篇

「ミスター・ハッピーネス」

新約のはじめにキリストの幸福論があるように、詩篇も幸福論で始まる。なぜこの人が、歩む、立つ、座るというすべての行動で、罪と悪を避けるか。それ

は彼がみことばの中に生きている結果である。さて、みことばに生きるということは、とりもなおさず、植物がその根を水に伸ばすように、神の臨在と祝福の中に魂の根を伸ばして生きることであって、その結果彼は、葉を繁らせ実を結び、生き生きと繁栄の人生を全うすることができるという、この詩篇はまことに美しくすばらしい。

4月 8日 今日の通読箇所 詩篇 第2篇

「詩篇の中の黙示録」

世の権力者、有力者は、神にさからい、その戒めを破り、神を締め出して、この世界を占領したつもりでいる。しかし神は彼らをあざ笑い、天において世界の真の王としてキリストをお立てになった。もし、今の間に悔い改めて神に従わないならば、キリストは世界の裁きの時に、すべての権力を「鉄棒で瀬戸物を砕くように」滅し去り、神を恐れるクリスチャンたちにこの世界を与えるであろう。この詩篇の内容は、そのまま黙示録に照応する。

4月 9日 今日の通読箇所 詩篇 第3篇

「夜の詩篇」

「伏して眠り、また目を覚す」という言葉があるので、この詩は次の4篇とともに、むかしから「夜の詩篇」などと呼ばれている。子供でなくても、夜は暗いさびしい心ぼそい時間である。また、しきりに物の思われる時間である。こういう時に、祈りつつ一日の生活について静かに反省し、また感謝し、自分の弱さや生活の難しさを思っていよいよ主に寄り頼み、主の臨在を感じつつ、信仰によって安らかに眠る。これはダビデだけでなく、すべてのクリスチャンの恵みの経験でしょう。

4月10日 今日の通読箇所 詩篇 第4篇

「食事と睡眠」

「床の上で静かに自分の心に語りなさい」また「わたしは安らかに伏し、また眠ります。主よ、わたしを安らかにおらせてくださるのはあなただけです」とはすばらしい。凡人にとっては夜の思いも時にさまざまで、不安や恐怖、怒りや嫉妬のため、心の乱れることも多い。しかし主の前に静かに自分に語り、祈りつつすべてを主に委ねて、安らかに眠れるのはありがたい。三度の食事を安らかに頂き、毎夜やすらかに眠ることができれば、これこそ本当の幸福というものですから。

4月11日 今日の通読箇所 詩篇 第5篇

「朝の詩篇」

[3節]を、ある人は次のように読む。「主よ。毎朝あなたがわたしの祈りの声を聞き、そして、服従の用意を整えてあなたを待ち望む、そういうわたしの姿をごらんにならないで、朝が過ぎ去ってしまうことは、決してないでしょう」と。人は誰でも新鮮な思いで朝を迎え一日の心備えをする。予定や計画とともに困難や誘惑も予想される一日を迎えようとして、朝ごとに祈り、「主と共に一日の生活の扉を開く」ことができるのは本当にクリスチャンの幸いだ。

4月12日 今日の通読箇所 詩篇 第6篇

「悲しい夜」

人にいじめられたか、病気や遭遇にいためつけられたか。とにかくこれは、悲しい夜の詩篇である。誰でもこういう時は本当に、ふしどを涙でただよわせつつ祈るのだ。主はその涙を見、泣き声を聞き、その祈りに答えてくださる。「すべて悪を行なうものよ。離れ去れ。主はわたしの泣く声を聞かれた」こうして心になぐさめと勝利を与えられた以上は、やがて祈りの応えとその結果が、目に見える現実となって現れてくるのは確実なのだ。

4月13日 今日の通読箇所 詩篇 第7篇

「信ずる者を守る盾」

悪い者が正しい者を攻撃し、しかも正しい者が不利で悪者が優勢であるという場面も、ままあることである。ダビデも若いときから、ずいぶんそういう経験をした。その時にダビデを支えたのは、神の正義に対する信仰と、また自分のとがめのない良心にもとづく「神はわたしの味方である」という確信だった。もとより世に完全な義人はいないが、日々の忠実な悔い改めと、救い主に対する信仰によって、とがめのない良心を持ち、神から与えられる義を確信することは許されるのだ。

4月14日 今日の通読箇所 詩篇 第8篇

「天と月と星」

神の造りたもうた美しく壮大な天体を見、また神の栄光を思うとき、人は自分の微小なことを感ずる。しかも神はなお、人間の中でもっとも微小な、みどりごや乳呑児の賛美を好みたもうという。「(神は)高く聖なところに住み、また心碎けてへりくだる者と共に住む」とイザヤも言うとおりだ。乾燥したイスラエル地方では夜空は特別に美しい。その空を見上げつつ神をたたえる、王者ダビデの、いつもながらの謙遜な姿もまた美しい。

4月15日 今日の通読箇所 詩篇 第9篇

「なやみの時のとりで」

昔、世の中が乱れていたころ、領主や貴族はとりでを作り、いざという時立て籠もって、敵や山賊の攻撃略奪から自分と家族の生命財産を守った。主はクリスチャンにとって「なやみの時のとりで」だ。主が彼を「捨てられたことがない」という証しはすばらしい。ダビデは国王として、全国に多くのとりでを築いた。しかし本当のとりでは主ご自身のみであることを、長い生涯の体験から、彼はよく知っていたのである。

4月16日 今日の通読箇所 詩篇 第10篇

「神はない」

「悪しきものはその思いに、すべて『神はない』と言う」パスカルも言うように、本当に神を信じる人が少ないように、本当に神を信じない人も少ない。人の心には神を恐れ、死を恐れ、裁きを恐れる思いがひそんでいる。悪しき者はむりに「神はない」と自分の心に言い聞かせながら、良心に背いて罪を犯しているのだ。つまり「よこしまな者には平安がない」のだ。〔イザヤ.57:21〕

4月17日 今日の通読箇所 詩篇 第11篇

「神のいますところ」

「主はその聖なる宮にいまし、主のみくらは天にあり、その目は人の子らをみそなわす」とあるが、新約には「自分のからだは聖霊の宮である」という教えもある。そのいずれの宮においても主は我々の礼拝を受け入れ、みそなわし、祈りを聞いてくださる。そして我々も主に身を献げ主に仕えるのだ。ソロモンが献堂式の時に「この所（神殿）に向って祈る時あなたの住家なる天でお聞きくださいと祈ったのも同じ意味なのである。

4月18日 今日の通読箇所 詩篇 第12篇

「楽器の指定」

詩篇は賛美歌集であって、もともとさまざまな楽器に合わせ、それぞれの曲で歌われたのである。だからときどきタイトルに、曲や歌いかたの指定がある。「シェミニテ」は新改訳に「八弦の琴」と訳してある。そういう琴つまり楽器の指定かも知れないし、あるいは「第八の弦」つまり低音の弦に合わせて歌う意味で、曲の指定かも知れない。なにしろ昔のことだからはっきりわかりませんが、東洋的で、少し哀調を帯びた歌い方のようなようです。

4月19日 今日の通読箇所 詩篇 第13篇

「死の眠り」

人間は暖かい時に居眠りができるが寒すぎても眠ってしまう。この場合は凍死につながる。クリスチャンも困難と弱さの中に閉じこめられてしまう時、その危険がある。十字架の前夜、ゲッセマネで弟子たちが眠ってしまい、そのあと悪魔に敗北したように。だからなかなか解放の光が見えず「主よいつまでですか？」といわざるを得ないようなとき、「死の眠りに陥ることのないように、わたしの目を明らかにしてください」と祈ることは大切だ。

4月20日 今日の通読箇所 詩篇 第14篇

「おろか者」

聖書の中に三人のばか者が出てくる。「心のうちに『神はない』と言う」のはその一人で彼の不道徳と迷いはその哲学から出てくるのだ。そのほか「おろか者は戯れごとに罪を犯す[箴言 10:23]」といわれ「おろか者よ、今夜なんじの魂取らるべし[ルカ 12:20]」と言う言葉もある。神を恐れず、罪を恐れず、未来を考えない者は、よし学識あり成功者であるように見えても、神の目から見れば、ただのおろか者にすぎない。

4月21日 今日の通読箇所 詩篇 第15篇

「礼拝の生活」

ここに言う「幕屋」は「神殿」のこと。「聖なる山」は「エルサレム」のこと、すなわち礼拝所のことだ。そこに住むというのは、祭司あるいは牧師になる意味ではない。人間が日々無意識の間にも太陽の光の中に生き空気の中に住むように、常に習慣的に神の臨在の中に生活することであり、「絶えず祈れ」とのみ言葉どおり、絶えざる祈りによって日々常に主との交わりに生きることなのだ。いわゆる「礼拝の生活」である。この詩篇にはそういう生活の秘訣の一部が歌われている。

4月22日 今日の通読箇所 詩篇 第16篇

「復活の予言」

これは昔から「キリストの復活を予書した詩篇」とされていて[使徒.2:22～31]では、使徒ペテロもキリストの復活を強調する説教の中でこの詩篇を説明している。この詩篇の作者は言う。わたしは「常に主を前に置く」、そして「主はわが右にいます」ゆえに「わたしは動かされることがない」、「心は幸福で体は健康だ」、「主は死後もわたしをよみに捨ておかれぬ」これらは作者ダビデの

経験であると共に、キリストの姿であり、同時に我々クリスチャンに模範を教えている。

4月23日 今日に通読箇所 詩篇 第17篇

「心、思い、行い」

[2~5]に「心、思い、口、言、行い、」また「道」などの言葉が並んでいる。人の生活は確かに「心」から出て、この順で「行動」に現れ、結局それが「生活」から、ひいては人生の「コース」そのものを決めていくのだろう。ダビデはここで、恐らく不遇な立場に身を置き、苦しい気持ちで祈っている。しかし「心」から順に自分の「生涯」を調べても、悔い改めず従わないため、神にとがめられるような所がないと祈っているのはさすがだ。

4月24日 今日に通読箇所 詩篇 第18篇1~17節

「人生の戦争」

ダビデは軍人として半生を戦乱の中に送ったので「岩」「城」「盾」「高きやぐら」などの価値を知っていた。それらのものの用意なしには、危険で生きてゆけないのである。しかし彼にとって、神こそはそれらに勝って確かな彼の保護者であり、助け手であった。神がダビデの祈りに答えて、彼の救いのために出で立つ姿を[7~17節]に見よう。何とすばらしい大仰な神の力の入れようだろう。この神の恵みと力は我々の場合も同じなのだ。

4月25日 今日に通読箇所 詩篇 第19篇1~14節

「自然界と聖書」

この有名な詩篇は三部に分れる。[1~6節]は自然界で、その代表として太陽が歌われている。[7~11節]は聖書だ。その価値は純金以上で、これを学ぶ楽しさは蜂蜜のようにおいしいと言われている。この二つの啓示によって、我々は神を崇め、光を受け、悔い改め、神に従い仕える。[11~14節]は我々の心と生活が神のみ心に適うようにとの祈りである。聖書中最も美しい詩篇の中で、19篇は特に美しく、人の愛唱して止まぬ所だ。

4月26日 今日に通読箇所 詩篇 第20篇1~9節

「非常時の礼拝」

これは戦争などが起った時のイスラエル国民の、礼拝の歌、祈りの詩篇だと思う。そういう時にイスラエルにおいて、最も優先的に、まずしなければならないのは「礼拝の規整」であった。神殿も特に清掃され、祭司も容儀を改めたが、恐らく国民全体が反省し悔い改め、心と生活を整え、信仰を振起し、上下一致して祈ったに違いない。馬、戦車その他の武器、兵員の準備はそのあとだった。この詩篇はそういう時の祈りが記されているのだ。

4月27日 今日の通読箇所 詩篇 第21篇1～13節

「勝利の感謝」

これは祈りに答えてくださる神さまの恵みによって、戦争が終り、困難が過ぎ去ったときの、感謝礼拝の歌、喜びの詩篇だと思う。この前の[20篇]をもう一度読み返してみると、内容の照応がよく分かる。これらの詩篇は国や国家や戦争だけでなく、我々にもよく当てはまる。我々も試験を克服することがあり、病気を克服することもある。「問題と解決」「祈りと感謝」という大波小波を乗り切って、我々の信仰生活もまた前進するのだ。

4月28日 今日の通読箇所 詩篇 第22篇1～19節

「十字架の予言」

1節をアラム語で言えば「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」である。キリストが十字架の上で、この叫び声をあげたのは誰も知るどころである。[7.8節]には人々の、ののしりとあざけりが[12～16節]には苦痛が、[16.17節]には槍で刺されることが[18.19節]には着物をくじ引きにされることが、明らか歌われているのは不思議としか言いようがない。たしかにこれは十字架の予言の詩篇なのである。今朝もう一度、この詩篇を読んで、主の十字架のお苦しみを考えよう。

4月29日 今日の通読箇所 詩篇 第23篇1～6節

「羊飼いの詩篇」

ダビデは羊飼いの少年から次第に身を起し、ついにはイスラエルの王位についた英雄である。しかし波乱に富んだその生涯の折目折目には、自分の不遇と弱さに泣いて、一匹の弱い羊のように消然とたたずんだことも多かったに違いない。今、功成り名遂げた王が、自分の生涯を回想して「主はわが羊飼いであって、自分は主の手にある一匹の弱い羊に過ぎない」と歌った。この詩篇にあふれている、彼の謙遜と感謝の心は本当にすばらしい。

4月30日 今日の通読箇所 詩篇 第24篇1～10節

「エルサレム入城」

ダビデは王位についたときにまず、混乱した礼拝整備の最初の段階として、長く田舎の仮小屋に置いてあった「契約の箱」をエルサレムに移した。そのとき人々に歌わせたのがこの詩篇である。「エルサレムに王として入城されるのも、この国の持主も、ダビデでなく主である」と歌わせた彼の信仰と謙遜はすばらしい。反対に「ドイツは私の私有財産だ」と豪語していたドイツのカイゼルなどは、結局第一次世界大戦を起して、世界を混乱させたのみか、自国をも滅すに至ったのである。